

1 - 5 2017年の日本の紫外線

国内3地点（札幌、つくば、那覇）における2017年の紅斑紫外線量の日積算値²の月平均値（以降、月平均値という）を図1-12に示す。ここでは、月平均値を参照値（1994～2008年の月別累年平均値）と比較して、その差が標準偏差以内のときを「並」、それより大きいときを「多い」、それより小さいときを「少ない」としている。札幌の月平均値は3月、5月に多かった。つくばの月平均値は1月、5月、6月に多く、8月と10月は少なくなった。那覇の月平均値は7月、8月に多くなっており、特に8月はその月として観測開始（1991年）以来2番目に多い値となった。これらの特徴は、各地点の日照時間やオゾン全量の状況などと概ね整合している。

つくばでは、8月の月平均値は参照値に比べ少なかったが、8月8日11時の紅斑紫外線量（瞬間値）は295 mW/m²を記録し、観測開始以来最も多い紅斑紫外線量となった。要因としては、上空のオゾンの量が少なかったことに加え、薄い雲からの散乱により局地的に紫外線が強くなったと考えられる。

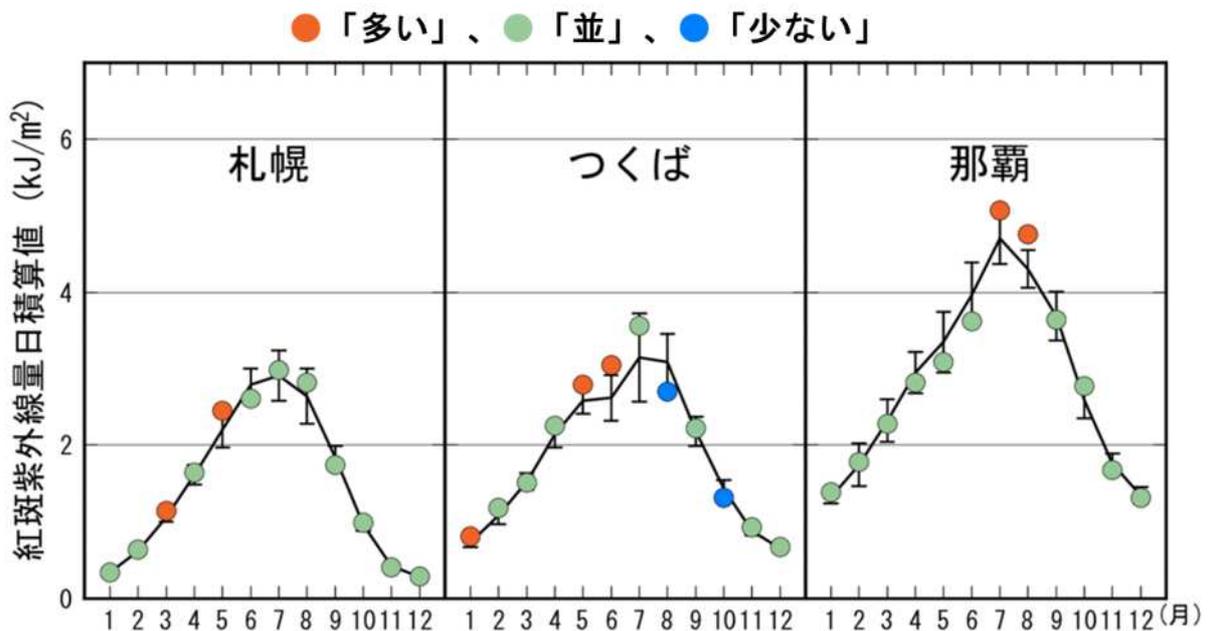


図1-12：2017年の紅斑紫外線量日積算値の月平均値

国内3地点（札幌、つくば、那覇）における紅斑紫外線量日積算値の月平均値。印（図では赤、緑、青）は2017年の月平均値。実線は1994～2008年の月別累年平均値。縦線はその標準偏差。

² 紅斑紫外線量は、観測時における紫外線の強さを表す瞬間値であり、日積算値は、1日分の各観測時における瞬間値を時間積分することにより算出した積分値である（紅斑紫外線量に関する詳しい解説は、巻末「用語解説」を参照）。